

獨逸通信 第5

小田大吉

(小田助教授より私への通信である。第4信は本誌5月號に發表した。仲々参考になつたと會員諸君からの批評もあつたから、引續き其の後の通信を更に發表する次第である。田中文男)

田中先生 6月20日 小田大吉

拜啓

御無沙汰申し上げまして申し譯ありません。自分でもあまり御無沙汰したのに驚いて周章てて筆を取つての仕末でございます。何分見學にかかりますと、あれもこれもと思つて見て居る内に延び延びになり、益々書きにくくなつてこんな失禮をしてしまひました。

皆様御無事にお過しの事と存じます。今年の東京の學會の様子は送つて参りました雑誌で承知致しました。口蓋破裂の御報告は随分反響が有つた様ですね。新しい教室も愈々竣工。先頃は引越しありました由、高原君から寫眞を頂き、一寸歸つて見たいものだと思ふ様な氣持がします。先日マールブルグでレヨベル教授に寫眞を見せました。と、立派だと感心して呉れました。

…………… 中略 ……………

私もお蔭様で元氣に見學を續けて居りますから御放念を願ひます。少し體重は減じた様ですが風邪も引きませんし、睡眠もよろしうございます。別紙に認めました様に、1月20日過ぎまでウィットマーク教授の所にお世話になりましたが、愈々耳鼻科の多忙な時期に成りましたので、フランクフルトのフォス教授の所と思ひましたが、バルンベック病院の病理研究所のグレイフ教授が、耳鼻

咽喉領域に興味をもつて觀察して居られ、昨年国際學會にも色々材料を出して居られましたので、數日間之を見せて頂く積りで訪問しました所、親切な方で、色々標本を見せて下さつたり、鼻咽腔の「ゼクチオン」を教へて頂いたり、短期間でしたが豫期以上の收穫が有つた様に思ひました。又其の間にグライフスワルドの生理のシュタインハウゼン教授から、豫て出しておきました手紙の返事を頂きましたので、實はもつと先でと思つて居りましたが、ハンブルグからならば餘り遠くないので、中2日程かけて行つて來まして、例の前庭の生理に関する實驗と「フィルム」とを見せて頂き、私の電氣の仕事色々を批判して頂いて有益でした。バルンベックはもつと居れば仲々材料も多く、且教授自身が我々の領域に對して特別の興味をもつて居られるので、色々と得る所が有らうと思ひましたが、耳鼻科の忙しくなる時に臨牀を離れて居るのは惜しいと思ひまして、丁度豫て手紙を出して置きましたフォス教授から御返事を頂きましたので、2月3日フランクフルトに移り、3月15日迄見學。渡邊君がやつて來きましたので伯林に歸り、伯林の「キーフエルシュタチオン」ヲ見學して、グライフスワルドでの實習の手續き等済ませて、4月20日過ぎ少し「フォニアトリー」を見たいと思ひまして、マールブルグに行き、「フイグステン」前のカツセルの獨逸鼻咽喉科學會に出席して、6月始め伯林に歸りて、次で又グライフスワルドに「ヘヒテ」の前庭の實驗方法を習ひに参りました。ウィーンは餘り澤山慾をして見てもと思ひますので、オットー・マイヤー教授の所に行つて其處だけエツクリ見せて貰ふ積りで手紙を出しておきましたら、6月、7月は都合が好いから來いとこの事でしたし、又カツセルで紹介してもらひましたので、グライフスワルドは短期で上げて早くウィーンにと思つたのですが、實驗

する魚（ヘイト）の都合が悪くて予定より長くなりましたので、これからウイーンに参ります。ウイーンで来月末まで勉強して、八月中旬までスイス、イタリーを2週間程旅行して、8月中旬迄に伯林に歸り、今度は方面を更へて、今年の春ウエルプブルクから伯林に轉じて来た、「ノイロヒルルグ」テヨンニフ教授の所で1箇月程手術見學をしながら英語を練習し、9月20日頃パリに行き1週間居てロンドンに渡り、10月6日の船で米國に渡りたいと思つて居ります。

…………… 中略 ……………

獨逸の耳鼻咽喉科學界は、丁度今轉換期にあるらしく、62、63歳と云ふ教授が多く、2、3年内にフォンアイケン、ヘルツォーグ、マルクス、カーレル、ウイットマーク、ラング等の教授は引退されるらしく、若いA.O「プロフェッサー」や「ドクメント」の内ではフォーゲル(伯林)、バート(伯林)、グライフェンシュタイン(ミュンヘン)、レヨベル(マールブルク)、ランゲンベック(ライプチヒ)等が有望な後繼者の候補者らしいのです。以前は大學教授の後繼者は、大學教授會で3名を選んで政府に提出し、其の内から任命されたさうですが、33年の革命以來は、一切政府の任命の由です。全く革命だから仕様がなと云つては居りますが、33年以來今迄は政治的事情に依つて人選が行はれて居たらしく、外科、齒科方面の人選は殊に「シュレックリヒ」だつた。耳鼻科は未だ良い方だと云つて居ましたが、それでもエセラ、ランゲンのシュベヒト、ボンのニュスマン等は「ブリバートドクメント」には成つては居たが、既に閉業して居たのが一躍正教授になつた。(大學に残つた連中を越して)これは黨に對する功績が大いに關係があると云つて居る向きもあります。「ナチス」運動の中心だつたミュンヘンの連中は矢張り都合が好いらしく、又遺傳をやつて居るものは好

いらしいと云ふ事です。フォスの後を貰つたシュワルツ—アルブレヒトの「シューラー」—は「モルフォログ」で遺傳ばかりやつて居り、「ハルスナーゼン・オーレンエルツテ」の「エルブブラット」を主宰して居ますが、これはシュワルツがラングクフルトを獲得した有力な理由であるらしい。遺傳に關係をした事をやつたランゲンベックは(尤もこの人は機能(聽能)検査の立派な研究を持つて居り、立派な學者だと思ひますが)「ルフト・ファールトメデチン・シュール」の正教授になりました。又ライプチヒには2人の正教授があります。即ち町に「ブリバートプラクシス」を持つて居たクニツクが先頃正教授に任命され、ラング教授は耳鼻科の「ディレクートル」で、クニツクは學長に任命されました。これは現在の獨逸でも異例ださうですが、政治的の事情だらうと云ふ取沙汰でございます。

…………… 中略 ……………

醫局の連中が「ドクトル・アルバイト」以外には科學的研究をしない。「アルバイト」らしいものをやつてるのは、教授にならうと云ふ、又はさうした見込みのある「オーベルアルト」級の連中だけですが、それも豫算等も直接社會衛生とか、豫防醫學、遺傳民族衛生とか、4年計畫とか、黨の指導部の意向に合致する方面には随分あるらしいですが、さうでない部門には随分制限があるらしい。(これは戦争後疲弊した獨逸には仕方の無い事と思ひますが)それにもつて來て教室の連中も教室の勤務以外にSAとかSSとかの「ディンスト」があつて仲々忙しいらしいです。獨逸の臨牀醫學にたづさわる人達が、殊に臨牀的方面ばかりやつて居りますのは、臨牀家は臨牀醫學の實際を研究しなければならないと云ふ考への外に、かうした餘裕が無いと云ふ點もあるらしい様に思ひます。

獨逸の科學はユダヤ人を追ひ出したから壊滅に瀕してる様に觀察をする人もありますが、獨逸の科學者にユダヤ系の偉い人が居たのは事實としても、グロート、レントゲン、ウィルヒョウが「ユード」であつたわけでもなく、殊に近來はユダヤ人は富を持つて居た爲に長く落付いて研究する事が出来、随つて教授の席を得る事が出来たと云ふ點も有る様ですから、ユダヤ人を追ひ出したと云ふ事よりも、其の後の人選が——革命直後である爲仕方が無いのでせうが——政治的事情によつて左右された所少くないと云ふ點の方が餘程意味があると云ふ見方をする人達もあります。但し近い内に教授の人選は以前の様になるらしいとの事です。學生又は教授の若い連中には、「ナチ」のカチカチが居て、これは所謂「ナチス」の「ウエルトアンシャウング」からのみ物を見ますから、教授も思ひ切つた事を云へないと云ふ様な事情もあるさうです。

何れにしても、目下獨逸の耳鼻科の若い學者で病理的方面に止つて勉強してる人もありますが、段々理學的方面に進んで來、又は形態學から入つて遺傳をやつてると云ふのが若い教授、又は有力な候補者の方向であり、次の獨逸耳鼻咽喉科の進む方向を暗示して居る様に思ひます。來年の學會は遺傳的聾の病理（アルブレヒト）と言語障礙（ナドレツナー）とが宿題で、前者は斷種法に關連して社會的意義が有り、後者は段々この方面に注

意を向けられて來た事を示すものと思ひます。

…………… 中略 ……………

私が獨逸に來てからもう1年と1箇月経つてしまひました。自分では一生懸命に見て來た積りで居りましたが、1年と云ふ纏まつた月日が経つて、今振返つて見ると何をして來たらうと心苦しくなります。私個人としては大變勉強になつたと思ひますが、しかしこれも自分のこれまでの勉強が足りないから感心して見る事が出来たに過ぎないものもありません。果して大學の爲に、國家の爲に何を教はり何を習つたらうと考へると、1年をもつと外に使ひ方も有つた様な氣もして、今少し暗い氣持になつて居ます。

見學中、フォス教授から先生によろしくとの御傳言を頂きました。フォス教授、ウフェノルデ教授、ウイットマーク教授に色々お世話になりましたから、御序の節、一言御挨拶御願ひ出来ませんでせうか。

學長を始め先生方に大變御無沙汰をして居りますが、いづれ近々御無沙汰の御詫びを申上げる積りですが、先生よりもお取りなしを願ひます。

高原君を始め醫局の諸君にも御無沙汰して居ります。獨逸の學生生活、醫局生活に就て見聞した所を書きたいと思つて居りますが、又オーストリに行きますと忙しくなつて短信で失禮致しますから8月に旅行から歸つたら纏めて書いて見る積りです。